# 入間川の水神信仰

柳　　正博

## I　はじめに

秩父・入間両郡の境をなす妻坂峠の近くを源とする入間川は，県西部を東西に流れ，上江橋付近で荒川と合流する全長約51kmの河川である。この川の上流の，名栗村や飯能市の山々は，良質の杉・檜が生い繁る土地として古くから知られてきた。ここで産出される木材は「西川材」と呼ばれ，大正年間に陸上交通が発達するまでは，筏を流し，江戸（東京）へ運ばれた。また，各地で橋を架ける以前は，渡船が行われ，両岸を結ぶ交通路として一役を担っていた。入間川の水は，流域のかんがい用水や水車の動力源にも利用され，農作物の生産に大きく貢献した。このほか，川漁の場としても機能し，多くの水産資源を供給している。

このように，入間川は，流域の人々の暮らしと密接に結びつき，恵みを与えた。しかし，大雨の折にはたび重なる水害をもたらし，沿岸地域を困惑させ，入間川に対する恐怖の念を抱かせたことも事実である。こうした川と生活とのかかわりを通じ，水にまつわる神である「水神」は，入間川流域においても，各地で信仰されてきた。水神信仰の様相は多岐にわたり，全体像をつかむのはなかなか容易でない。

入間川における水神信仰の調査は，沿岸の市町村で進められているほか，さきに（昭和58～62年度）埼玉県が実施した「荒川総合調査」の一環としても行われている。また，埼玉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている歴史の道調査事業「入間川水運」のなかでも調査項目に取り上げられ，多くのデータが集められている。

小稿では，筆者自身の調査とこれらの資料を中心に，入間川の水神信仰についてまとめ，若干の検討を試みるものである。

## II　水神信仰について

ふつう「水神」と呼ばれる神には，いろいろある。元来は「水の神」一つとしてとらえられていたものが，時代の流れとともにさまざまな考えが導入され，複雑になった。すなわち，いわゆる水神宮として祀られている神のほかに，水天宮や弁才天，九頭龍神，あるいは金毘羅宮や大杉大神なども水神として信仰されている。そしてこれらの神に対する信仰内容は，必ずしも一律でなく，簡単には把握できない。

荒川総合調査で調べられた事例を見ると，水神の信仰内容は，飲料水やかんがい用水等の守護神

としての水神，筏乗りや船頭など水運業者の祀る水神，水難除けや水害除けの水神，漁業関係者が漁撈の安全と豊漁を祈って祠る水神，あるいは椀貸淵の伝承等をあげることができる。

水神信仰をどのように類型化したらよいかという点については，にわかに決められる事柄ではない。ここでは，荒川総合調査等の成果をふまえ，また，今回の調査のデータをも考慮に入れ，とりあえず次項に示すいくつかのタイプに分けて報告することにする。

## III　入間川の水神信仰

### (1) 筏師や船頭が祀る水神

冒頭でも述べたように，入間川（名栗川）上流の山地は，西川材の供給地で，大正初めごろまでは筏をさかんに流していた。伐採した木材は，ふつう名郷（名栗村上名栗）まで運び出し，そこからサナガシ（一本流し）が行われた。そして，森河原（名栗村上名栗）から筏を流し，飯能河原で継ぎ立てを行った。名栗から飯能の間は，大きな岩が多く，また，流れも急で，筏流しにとっては難儀な場所であった。

飯能市赤沢のM製材所内に祀られている水天宮祠（図版１－２）は，筏流しの安全という意味が含まれていた。この祠は，かつては川の淵のほとりに祀られていた。その後，ここへ堰ができ，水車へ水を引いて麦搗（つ）きをしたり，あるいは水力による製材が行われるようになると，円滑に稼動するよう水天宮へ水の確保を祈願したともいわれる。

この水天宮祠から少し下流の，茶内の川原には大きな岩があり，その上に弁天祠（図版１－３）が祀られている。茶内には，山から運び出した木材を集積し，筏を組む土場（とば）があったことや，この岩のそばは筏にとっての難所であったことから，安全な運行を弁天祠に祈願したといわれている。筏が姿を消した現在でも，例年４月末には茶内全体で集まり，ここでお日待が行われる。

飯能市原市場，二ノ瀬橋下流の左岸の川べりの岩の上にも弁天祠がある。この祠も筏乗りの安全を祈って祀られたものであると伝えられている。

飯能河原に面した入間川左岸の段丘上は，筏宿が立ち並んでいた。この並びに水天宮（図版１－４）が祀られている。飯能河原で筏の継ぎ立てが行われていたことや，祠が筏宿の続きにあることから，ここも筏と関係する水神のように見えるが，今回明確な伝承をつかむことはできなかった。

次に，渡船に関係する水神について述べることにする。

川越市鯨井と同市小ケ谷を結んでいた鯨井の渡しのそばに，かつて金刀比羅宮が祀られていた。現在この祠は，堤内のＴ家の屋敷神として祀られている。Ｔ家は以前，鯨井の渡しで渡船を営み，祠はその祖先が建てたものといわれる。これについては，次のような記録がある。

当宮の創立年紀は詳かではないが，記録によると文化２年11月25日(1805)，当時の主，田中宗八が再興したとあるから，それ以前に祀られたものと思われる。その頃から田中家は，入間川の渡船を行っており，地区内の人が舟のこぎ手として働いていた。そして金刀比羅宮を祀り，舟の安全を祈願し崇敬していたものである。明治43年に当地方を襲った大洪水により，家・社ともに流されたが，社は下流で発見回収し，当時の主，辨藏が別記９名の崇敬者の浄財により，大正２

年９月15日に再建した。

大正８年，雁見橋が完成したため，家・社は同橋の坂下に移転，さらに昭和34年，道路改良工事のため現在地に移転し，社を屋敷内に祀った（図版２－４）。

以上がこの金刀比羅宮が祀られたいきさつであるが，渡船の行われなくなった今は，「未来永劫に広く世の人々に家内安全，交通安全の御加護あらんことを願い，この場所へ遷座する」といって，信仰内容を新たにし，祈願している。

川島町下大屋敷の，旧土橋渡しに祀られた水天宮碑（図版２－５）には，「発起人　土橋渡船場世話人　岩田仁助　山田市茂　山田保次　笠井清司　宇津木政吉　　明治四十五年六月建立　　昭和二年三月再建　石材寄附者　笠井清司」という刻銘がある。この渡船場は，明治の中頃設けられ，現在の川島町下大屋敷と川越市芳野台を結んでいた。今は出丸橋が架設され，その北側50メートルほどのところへこの碑が建っている。渡船が行われていた時代には，碑のそばへ渡し守の家があった。それから判断すると，渡船場の安全を祈願したものと思われるが，造立時代（明治45年）を見ると明治43年の大水と関連して，渡船場を洪水から守るという要素が含まれていることも考えられよう。

川島町出丸中郷，県道平沼・中老袋線沿いに，金比羅宮を祀った祠がある（図版２－６）。この中にに石祠があり，「文化十癸酉四月　願主　井上文右衛門」という銘がある。伝承によれば，文右衛門なる人物は船乗りで，他所からここへ移って来た折に金比羅宮を祀った。以来，水神として出丸中郷の人々からも信仰されるようになったという。

### (2) 飲料水や農業用水の守護神として祀る水神

狭山市を流れる入間川右岸の段丘上，大字入間川の諏訪神社の近くに，清水のわき出口がある。ここへ「水祖神」と銘のある水神，それに古くから「水神さん」と呼ばれてきた祠が祀られている。この水は，かつて飲料水としてこの付近の人々に利用されてきたものである。また，ここからわき出た水は，近在の水田のかんがい用水としての機能も果たしていたという。

入間市鍵山，狭山市鵜ノ木（図版２－１）の２つの浄水場には，水神碑が祀られている。きれいな水の安定供給を願ってのものといえよう。

この内容の水神は，今回上流部では調査できなかった。今後明らかにしていかなくてはならない。

### (3) 漁師が信仰する水神

狭山市上奥富にある天理教分教会の斜め前の土手上に，明治14年（1881）に祀られた水神碑がある。これは入間川の漁業関係者によって建てられたもので，水難からのがれ，かつ豊漁を祈願するために設けられたものではないかといわれている。

碑や祠があるわけではないが，川越市菅間の入間川の堰で，昭和57年（1982）に水神講が催された。これは埼玉県南部漁業協同組合の主催によるもので，豊漁を祈願し，漁業の安全を祈って例年行われてきたものである。現在は「水神祭」とはいうものの，水神に係わる行事はほとんど姿を消し，漁協の役員，それに農業用水の管理者等総勢約30名参加し，酒宴が催された。

### (4) 水害よけ・水難よけとして祀られた水神

今回の調査データを概観すると，飯能から下流には，かつて大水が出た折に破堤したり，危険な状況に陥ったため，二度と水害が起きぬよう水神を祀った例が少なくない。それらが建てられた年

代を見ると，狭山市下奥富の九頭龍大権現碑（図版２－２）のように，近世に祀られたものもあるが，明治43年の大水にまつわる水神が少なくない。そこでまず，明治43年の大水に着目し，水神との係わりを見てゆくことにする。

明治43年は，埼玉県は全県的に「神武以来」といわれる大洪水に見舞われた。この年は春から長雨傾向が続き，７月が終わろうとしてもいっこうに梅雨明けの気配がなかった。それどころか８月に入ると，いっそう雨が強まり，６日からは連日連夜の豪雨となった。『明治四十三年埼玉県水害誌』は，当時の狭山市とその近郊の状況を次のように伝えている。

**一　入間川筋入間郡奥富村，日東村入會**

本箇所の堤塘切所たるや百十間にして初め水勢激突護岸工を破壊し堤脚は益々浸蝕せられ危険なるに依り地元人民等を督励し大なる枝葉付の樹木を伐採運搬し掛け木と為し晝夜防禦に従事すると雖も缺崩箇所水深三間餘あり地盤は砂礫にして益々蠶蝕せられ地盤を押切り遂に堤防の決潰を招くに至れり而して切所よりは入間川全部の水流侵入し為めに本川の砂礫堆積丘となり僅か一葦の支流を存するのみ抑本箇所は入間郡咽喉の地に當り奥富，日東，大田，田面澤，川越町一部を浸れし夫より入間郡北東部一圓に氾濫し其水勢猛烈稀有の惨状を見るに至れり……

このように，いまだかつてないような洪水に見舞われた様子をとらえることができるが，この時，入間川町（現狭山市入間川）では，危く堤防が欠壊しそうになった。そこで，Ｋ酒店で空俵を提供，それに土砂を詰めて何俵も堤へ積み上げ，難をのがれたという。そのため，そこへ水神（図版２－３）を祀り，再びこのような災害が起きぬよう祈願したのである。

また，狭山市柏原新田に祀られている九頭龍大権現は，ここに住む９軒で祀る水神である。その由来は，明治（43年か？）の大水の際，旧家であるＭ家の隣家まで水害が及んだ。Ｍ家でも家族２人安比奈新田の方まで流されたが，辛くも難をのがれた。そこで，信州の戸隠神社からお札を受けここへ水神を祀ったといわれる。例年５月初旬にお日待が行われ，この土地の全戸が集まり，飲食をし，水害に遭わないよう祈るのである。

川越市小ケ谷の稲荷神社境内へ祀られている九頭龍神は，かつて入間川の土手の中腹に祀られていた。それが土手普請に伴い，現在地へ移設されたものであるが，これも水害に遭遇しないように祀られたものであると伝えられている。その対岸，川越市鯨井の旧鯨井の渡しに祀られていた金刀比羅宮は，前述のように，明治43年の大水で流失した（その後見つかる）。その付近の様子は次のとおりであった。

８月に入り降り続いた雨はいっこうに納まらず，８月７日から消防団・青年団等を中心に総出で水防に取り組んだ。空俵を集めては土のうを作り，堤防へ積み上げたが，その甲斐もなく，８日には入間川へ注ぐ小畔川の形がわからなくなるほど増水，そして10日には入間川の水防も限界に達し，作業に当たっていた人は増水のため各家へ帰れず常楽寺へ避難した。全員の避難が終わるか終わらないかのうちに，ゴオーッという不気味な音を立てて堤防が決壊，その途端，水が大波となり上戸の水田へ押し寄せて来たという。あまりのすごさに常楽寺へ命からがら逃げて来た人々は恐ろしさと落胆で力が抜けたという（『川越市歴史散歩』）。

同じ頃，入間・越辺・小畔の三川が合流する落合橋の辺りもさんたんたる有様で，住民を舟で救助にあたったが，間に合わず死者が出た家もあった。明治42年に完成した落合橋は，８月13日には水がつきそうな状態で，夕方にはらんかんの上を水が流れ始めた。この付近は一面の海となり，気の遠くなる状況であったという。

落合橋の少し上流，川島町下伊草の越辺川の堤内には二基の九頭龍大権現が建っている。銘文を見ると、いずれも明治43年における破堤地点を示したものであることがわかる。明治43年８月１日から11日までの伊草地区における被害状況は,「被害560戸，田畑422町６反，堤防決壊４件，堤防破壊７件」となっている。これら破堤地点に祀られた水神は，再度惨状が起こらないように祈願するものであると共に，そこがいざという時の危険区域であることを示す役割を果たしているともいえるだろう。

明治43年の大水については上に示したとおりである。このほか，狭山市柏原の水天宮碑(表16)，同市上広瀬の土手上の水天宮祠(表14)，そして笹井の堰のところへ祀られている水天宮祠（表13）は，いずれも大雨の折に入間川が増水し，被害を及ぼしたため，堤防を築き，洪水から守ってもらうように祀られた水神であると伝えられている。

川越市三光町の妙昌寺境内に祀られている弁財天は，「経ケ島弁財天」という。この近くを赤間川（新河岸川）が流れ，すぐそばには入間川も流れていた。入間川は，たいへん荒れる川で，少し雨が降るとたちまち氾濫し，赤間川の水といっしょになった。そのため，田畑はもとより民家まで水につかることが少なくなかった。水が引いた後も沼地のままで，農耕ができず，人々は大変困っていた。そこで,いろいろと思案したところ,妙昌寺の境内に塚をつくり，その上へお堂を建てて，弁財天を祀った。お堂のまわりに池をつくったので，ちょうど島のようになり，ここを「経ケ島弁財天」と呼ぶようになったという。

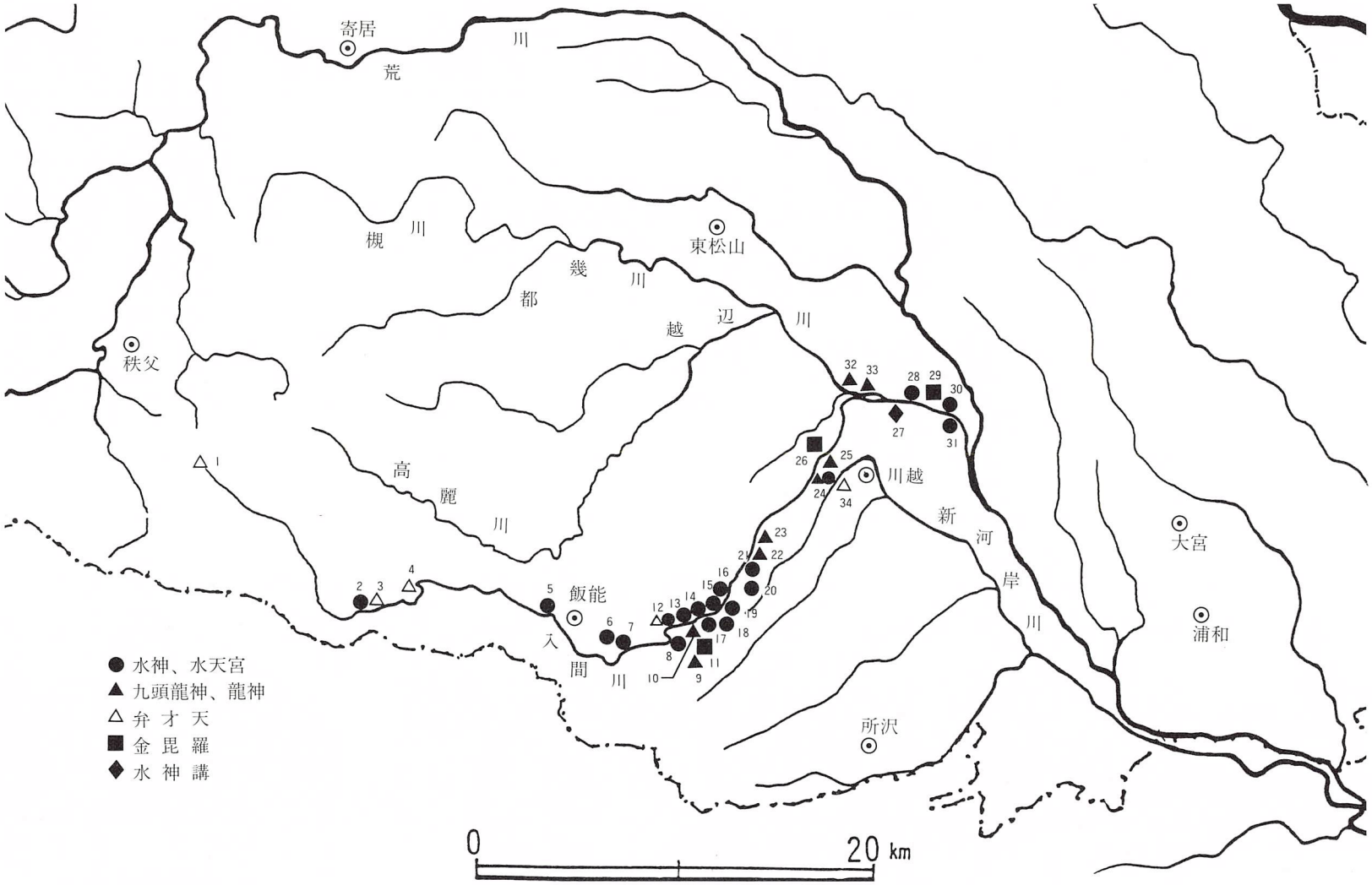
弁財天を祀るようになってからは，水の被害も少なくなり，田畑もうるおったので，人々は安心して暮らすことができたと伝えられている。これも弁天様のおかげということで評判になり，霊験あらたかな水神として，今もたくさんの参詣人でにぎわっている。

次に，水難に遭わないように祀ったとされる水神についてふれてみよう。

入間市野田の中橋は，かつては中の渡しと呼ばれる渡河点であった。ここの左岸の崖の上へ祀られている水天宮祠（図版１－５）は，渡しで水難に遭遇しないようにと祀られたものである。

狭山市笹井，通称「竹が淵」の段丘上に，辨才天・水神宮碑があり，ここは木造の祠がある（図版１－６）。この水神は一度他所へ移設したといわれているが,その後竹が淵で水難が相次いだため,またもとの位置へもどしたという。

以上述べた事例のほか，安産祈願のために水神を拝む事例も見られるが，これについては39頁の表へ示した。




入間川の主な水神の分布

| No. | 名　　称 | 所　在　地 | 銘　文　・　そ　の　他 | 内容 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 弁　財　天　祠 | 名栗村上名栗 | 「宇賀弁財天」（現在地より下流の岩の上から移設） | |
| 2 | 水　天　宮　祠 | 飯能市赤沢 | （M製材所内に祀られている） | A |
| 3 | 弁　天　祠 | 同 | （茶内の川原の岩の上にある） | A |
| 4 | 同 | 〃　原市場 | （二ノ瀬下流，川に面した岩の上にある） | A |
| 5 | 水　天　宮　社 | 〃　飯能 | （旧筏宿の並びに位置する） | |
| 6 | 水　天　宮　祠 | 入間市野田（白髭神社） | 「寛政八辰九月吉日　武劦高麗郡野田村講中下中」 | D |
| 7 | 水　天　宮　社 | 〃　野田 | | DE |
| 8 | 水　神　碑 | 〃　鍵山（浄水場） | 「昭和三十三年八月吉日建立」武蔵町浄水道建設審議会委員の氏名あり | B |
| 9 | 八　大　龍　王 | 〃　高倉 | | |
| 10 | 同 | 〃　春日町 | | |
| 11 | 金　毘　羅　宮 | 〃　鍵山 | | |
| 12 | 辨才天・水神宮祠 | 狭山市笹井 | 「弘化三丙午閏五月日　大願主　水車　巻田孫市」 | D |
| 13 | 水　天　宮　祠 | 同 | | DE |
| 14 | 同 | 〃　上広瀬 | | DE |
| 15 | 水　神　祠 | 同 | | |
| 16 | 水　天　宮　碑 | 〃　柏原 | 「明治二十七年七月　組世話人　柏原村　神田元次郎他12名　発起人　斎藤彦太郎他４名」 | D |
| 17 | 水　神　乃　碑 | 〃　鵜ノ木（浄水場） | 「狭山市長　町田佐一　昭和四十四年七月建之　狭山市水道課」 | B |
| 18 | 水　祖　神 | 〃　入間川 | 「大正二年十一月　小林力蔵」 | B |
| 18 | 水　神　祠 | 同 | | B |
| 19 | 水　神　碑 | 同 | 「明治四十四年六月　入間川町」 | D |
| 20 | 水　天　宮　碑 | 〃　狭山（愛宕神社） | | |
| 21 | 水　神　碑 | 〃　上奥富 | 「明治十四年十二月　上奥富邨」 | C |
| 22 | 九頭龍大権現碑 | 〃　下奥富 | 「嘉永三年次庚戌十二月　法橋口　願主　小島弥五兵衛」 | D |
| 23 | 戸隠神社　九頭龍大権現祠 | 〃　柏原新田 | 「大正八年八月吉日　柏原新田中」 | D |
| 24 | 水神宮　八大龍王　山田霊神 | 川越市小ケ谷 | | |
| 25 | 九　頭　龍　神　祠 | 〃　（稲荷神社） | 土手普請に伴い，旧土手から現在地へ移設 | D |
| 26 | 金　刀　比　羅　宮 | 〃　鯨井 | 旧鯨井の渡しから現在地へ移設 | A |
| 27 | 水　神　講 | 〃　菅間 | | C |
| 28 | 水　天　宮　碑 | 川島町下大屋敷 | 「明治四十五年六月五日建立　昭和二年三月再建　発起人　土橋渡船場　世話人　岩田仁助他５名」 | A |
| 29 | 金　毘　羅　宮 | 〃　出丸中郷 | 「文化十癸酉四月　願主　井上文右衛門」 | A |
| 30 | 水　神　碑 | 〃 | 「明治十七年一月建　出丸中郷　祭主　加藤幸三郎」旧金兵衛河岸から移設 | |
| 31 | 同 | 〃 | 「文化八辛未年六月吉日　右村々信心家内安全為也　世話人　新井長次郎　中郷　加藤文右衛門」 | |
| 32 | 九頭龍大権現碑 | 〃　下伊草 | 「明治四十三年八月十日破堤　明治四十五年四月吉日建之　発起人　柳川久平他５名」 | D |
| 33 | 同 | 〃 | 「明治四十三年八月十日破堤　明治四十五年四月吉日建之　発起人　新井留作他５名」 | D |
| 34 | 経ケ島　弁財天 | 川越市三光町（妙昌寺） | | D |

**主な水神一覧**　表の番号は左頁の図のものと一致する。なお，伝承等で明らかにされた信仰の内容を次の記号で示した。

A　筏師や船頭が祀る水神
B　飲料水・農業用水の守護神としての水神
C　漁師が信仰する水神
D　水害・水難よけとして祀る水神
E　安産祈願として祀る水神

## Ⅳ　おわりに

入間川の水神を４つのタイプに分けて見てきた。この分類はあくまで便宜的なものであり，この川に適した分け方であるか判断するのは一考を要する。

さて，入間川の水神の分布を見ると，上流から飯能までは主として筏乗りにかかわるもの，飯能を過ぎ，台地から低地へ入ると，水害から守ってもらうために祀った水神が多く目につく。洪水よけとして祀られた水神は，破堤地点か危険にさらされた場所へ祀られ，堤防の守護神として機能している。そればかりでなく，そこが災害時における危険箇所であることを示すものであり，人々の知恵がうかがわれる。渡船場の安全を祈るために祀られた水神も数例見られるが，新河岸川のような船乗りの大杉信仰は今回出て来なかった。このことは，新河岸川と入間川の水運の機能のちがいを象徴していると考えることもできよう。入間川筋の地域には，たとえば狭山市に見られるごとく，「河岸街道」と呼ばれる道がある。これは新河岸へ通ずる道をさすもので，この地域の交易は，新河岸まで陸路をとっていたのである。水運のさかんな時代は，新河岸川を幹線とするならば，入間川は地方交通であったといえようが，こうした川のあり方が水神信仰の特色にもそのまま反映されているといっても過言ではない。

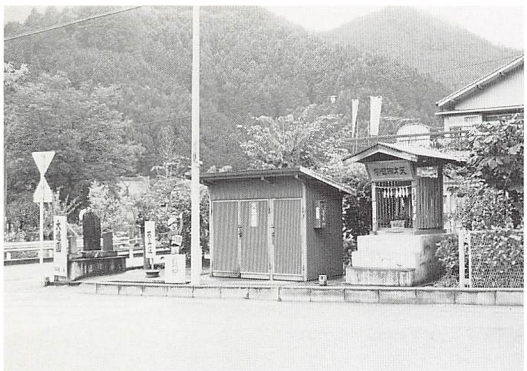
小稿は，いわば中間報告的な段階で，入間川の水神について論ずるには，さらに調査が必要なことを痛感する。今後，他の河川ともども調査を重ね，水神信仰のアプローチを深めたいと思う。

終わりに，小稿作成に当たり，下記の参考文献のほか，昭和62年度「歴史の道」調査資料をも参考にさせていただいた。記して謝意を表する次第である。

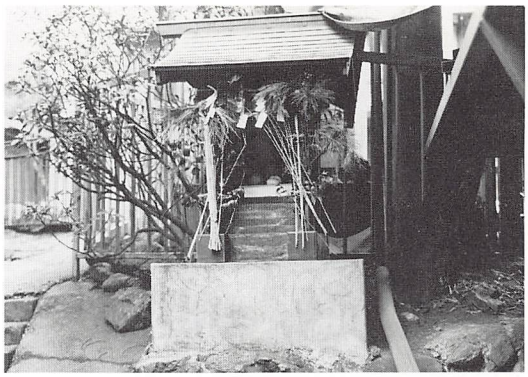
## 参考文献

『荒川　人文Ⅲ　―荒川総合調査報告書４―』　1988　埼玉県
『新河岸川の水運』（歴史の道調査報告書第八集）　1987　埼玉県教育委員会
『入間川の水運』（歴史の道調査報告書第九集）　1988　埼玉県教育委員会
『埼玉県市町村誌　第八巻』　1976　埼玉県教育委員会
『埼玉県立図書館復刻叢書㈩　明治四十三年埼玉県水害誌』　1987　埼玉県立図書館
『町の今昔物語第１集　ふるさと川島』　1980　川島町中央公民館
新井　博『川越の歴史散歩　霞ヶ関・名細編』　1982　川越郷土史刊行会
『狭山市史　民俗編』　1984　狭山市
『続川越の伝説』　1982　川越市教育委員会
宮村　忠『水害　治水と水防の知恵』　1985　中央公論社

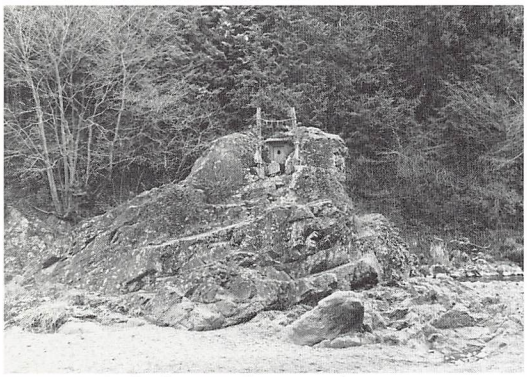
図版 1



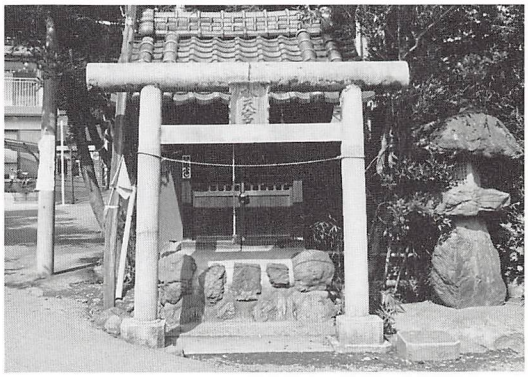
1　弁財天祠(名栗村上名栗)



2　水天宮祠(飯能市赤沢)

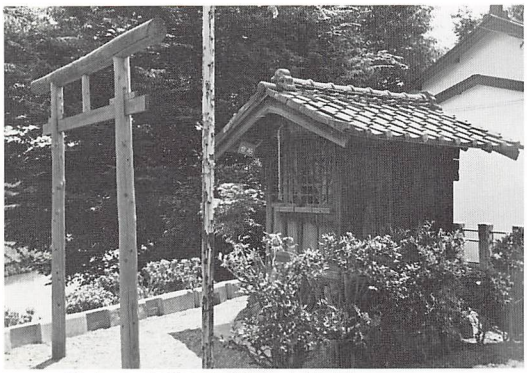


3　弁天祠(飯能市赤沢)

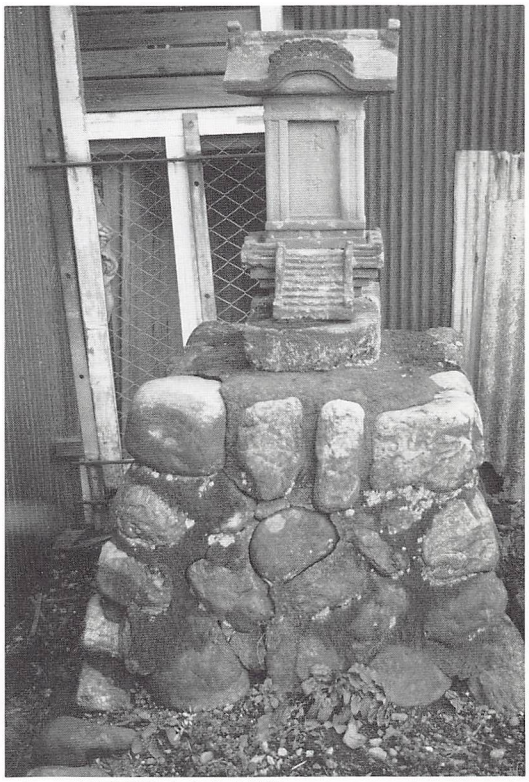


4　水天宮祠(飯能市飯能)

5　水天宮祠(入間市野田)



6　辨才天・水神宮祠(狭山市笹井)

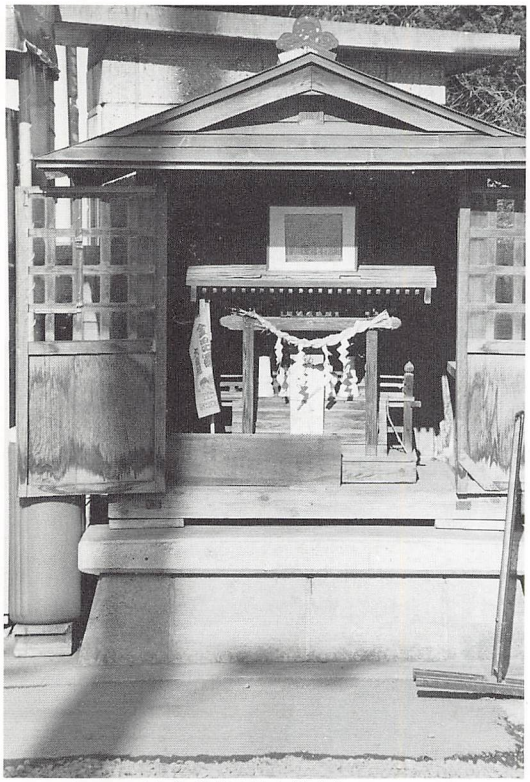


7　水神祠(狭山市上広瀬)

1　水神碑(狭山市鵜ノ木, 浄水場)

2　九頭龍大権現碑(狭山市下奥富)

3　水神碑(狭山市入間川)



4　金刀比羅大権現(川越市鯨井)

5　水天宮碑(川島町下大屋敷)

6　金毘羅宮(川島町出丸中郷)